

## 『ウィリアム・ワイラーの『嵐が丘』』

他に例がないほど幅広いジャンルを手がけ、鋭い人間観察ときめ細かい演出で作品を夫々のジャンルでの一級品に仕上げたワイラー監督が、初期にどんな映画作りをしていたのかという興味でこの映画を観ました。原作の小説について、概要紹介を読んだだけの私が勝手に作り上げていた「嵐が丘」のイメージは、ヒースクリフの復讐劇という感じでしたが、ワイラー監督の「嵐が丘」から受けた印象は、ヒースクリフとキャシーの悲恋劇という感じで、少し意外でした。

何しろ分厚く濃厚なエミリー・ブロンテの小説の世界を100分そこそこに押し込めるのですから、ストーリーの展開はややダイジェスト的なところを感じましたが、シーンとしては約70年前の作品という古さを全く感じさせない、素晴らしいシーンにあふれていました。

中でも特に感激したのはキャシーを演じたマール・オベロンの演技が光った二つのシーンです。まずはリントン家で開かれたダンスパーティーの夜のシーン。イザベラに招待されたヒースクリフが会場に現れる。キャシーが気付く。ヒースクリフがキャシーをテラスに誘う。ヒースクリフが迫る。キャシーが拒んで去る。この間オベロンがキャシーの激しい心の動揺を表情(特に眼)だけで表現しきった演技は素晴らしかった。

あと一つは、キャシーの最後のシーン。キャシーがエドガーに、城に咲いているヒースを摘んできてと頼む。エドガーが出て行き、入れ替わりにヒースクリフが現われる。抱き合い、責めあい、抱き合う短いが激しい時間。乞われてヒースクリフがキャシーを窓際まで連れていく。二人で寄り添って思い出のペニストン岩を見つめる。キャシーの喜びの表情が狂おしい恐ろしい表情に変わっていき、ヒースクリフに必死にしがみつくと、オベロンの演技力なのかワイラーの指導力なのか、この素晴らしいシーンで、私はいっぺんにこの作品が好きになりました。

なお、悲恋物語としては仕方なかったのかもしれませんが、オリヴィエはいずれの場面でもかっこ良すぎると思いました。ただ彼の目力は凄味がありました。

作品を観たあとにいろいろ調

べてみたら、とてもここに書ききれないくらい多くの興味深い話題にぶち当たり、得をしたような気持ちになりました。幾つか紹介します。

・原題の WUTHERING は普通の辞書では出てこない。Yahoo で調べたら、620 万件の記事が !WUTHERING=「嵐が吹き荒れる」という方言だった。

・『嵐が丘』の舞台の「ハワース(リヴァプールから約60キロ)」周辺へは、ファンが多く観光に訪れている。

・ブロンテ姉妹自身も、人生の多くの時間をこの地の牧師館で過ごした。エミリーは兄の葬式の時にひいた風邪がもとで30才で早逝した。シャーロットも38歳で亡くなった。当時のその地方での平均寿命は25歳だったとか。

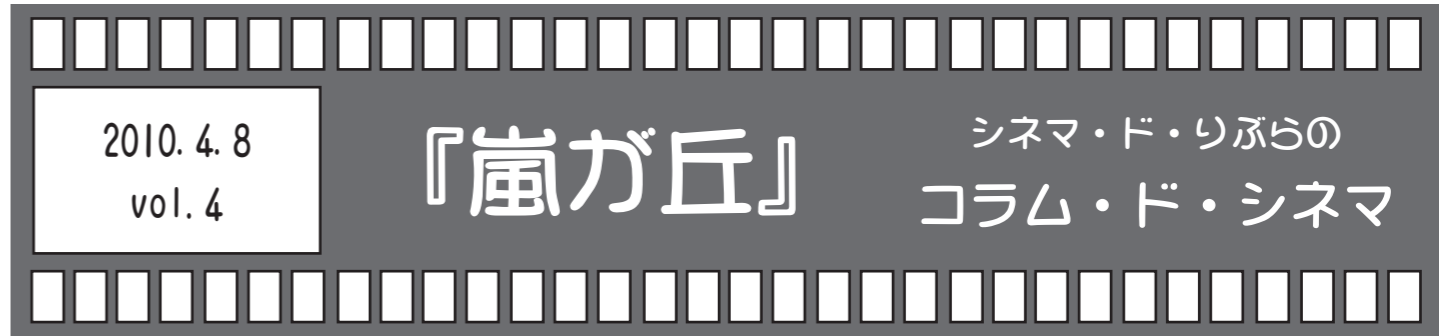
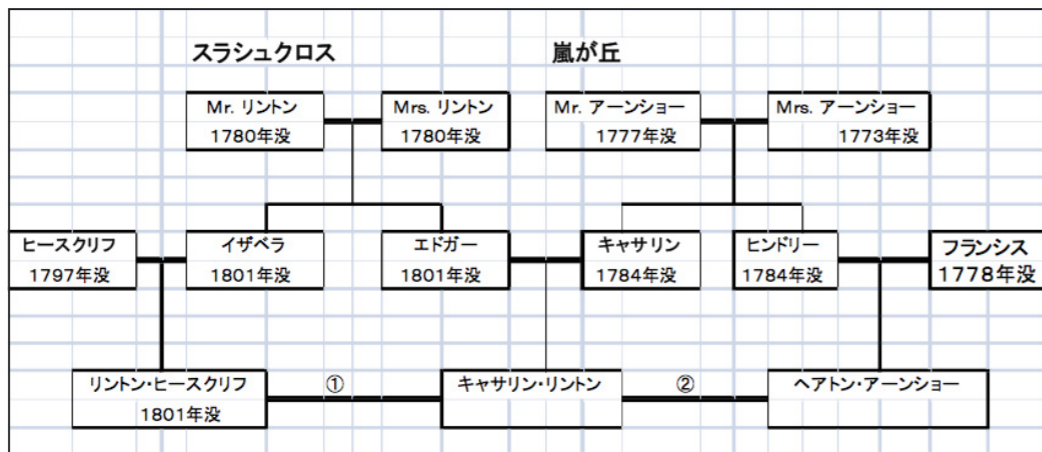
・『嵐が丘』は6度映画化されていて、日本でも1988年に吉田喜重監督が松田優作と田中裕子主演で撮っている。また1992年のピーター・コズミンスキー監督の作品では、坂本龍一が音楽を担当している。

・英国のシンガーソングライターのケイト・ブッシュのデビュー・シングルは『嵐が丘』でこの曲は全英で4週連続で1位を続けた。

・ヒースクリフ=ヒース+クリフ(断崖)=ヒースが一杯咲いている崖=ペニストン岩 K.M

## 「エミリー・ブロンテ原作『嵐が丘』を読む」

映画ではヒースクリフとキャサリンの愛の物語になっているが、原作ではさらに、夫々の子供の代まで復讐が続く。『嵐が丘』は謎に包まれた作品として、川口喬一著『嵐が丘を読む』、中岡洋著『嵐が丘を読む』、廣野由美子著『嵐が丘の謎を解く』など、数々の解説書がりぶらの図書館に有ります。原作と共に、是非お読みください。 au



## 「観賞の楽しみ」

『嵐が丘』の上映が決定しましたが、この作品は、映画・DVD・テレビの再放送などでも一度も観賞をしていませんでしたので、早速図書館で本を読みました。

1847年エミリー・ブロンテ作(河島弘美訳、岩波文庫)上下615ページの長編でしたが、読書後にまず感じたのは、動きが少なく(人里離れた田舎にある「スラッシュクロス」と「嵐が丘」の二ヶ所)、セリフが長い(1000~1600文字が度々)ということでした。まるで舞台劇を思わせる設定であり、映画としてどう作成されたのかが一番の関心ごとになり、上映会が楽しみです。

『嵐が丘』には、主人のアーンショーと夫人、その子供であるヒンドリーとキャサリンが住んでいますが、ある日主人は、外出先で身寄りの無い男児ヒースクリフを連れて帰り、自分の子供以上に可愛がりました。しかしアーンショーが亡くなり館の主人がヒンドリーになると、ヒースクリフを下働きにして虐待します。それでもヒースクリフとキャサリンは仲が良く、お互いに恋心を抱くようになります。

「スラッシュクロス」には上流階級のリントン夫妻とその子供のエドガーとイザベラが住んでいました。キャサリンは上流階級に憧れを持ち、ヒースクリフを必要としながらもエドガーの求婚を受けてしまいます。そして、ショックを受けたヒースクリフは姿を消してしまいます。

12年後、ヒースクリフはアメリカで成功し、大資産家として戻ってきます。それからの復習が凄い。下働きにしたヒンドリー、キャサリンを奪ったエドガー、自分を捨てたキャサリンに対し、激しい言葉や暴力、尋常でない行為などに満ちた異様な世界が書かれています。全部は書ききれませんが、以下の文章だけは報告したいと思います。

《キャサリンの死を知り、ヒースクリフは激情のあまり「おれの祈りはただ一つだ。舌がこわばるまで繰り返すぞ! キャサリン・アーンショーよ、おれがこうして生きている限り、安らかに眠ることのないように! おれが殺したと

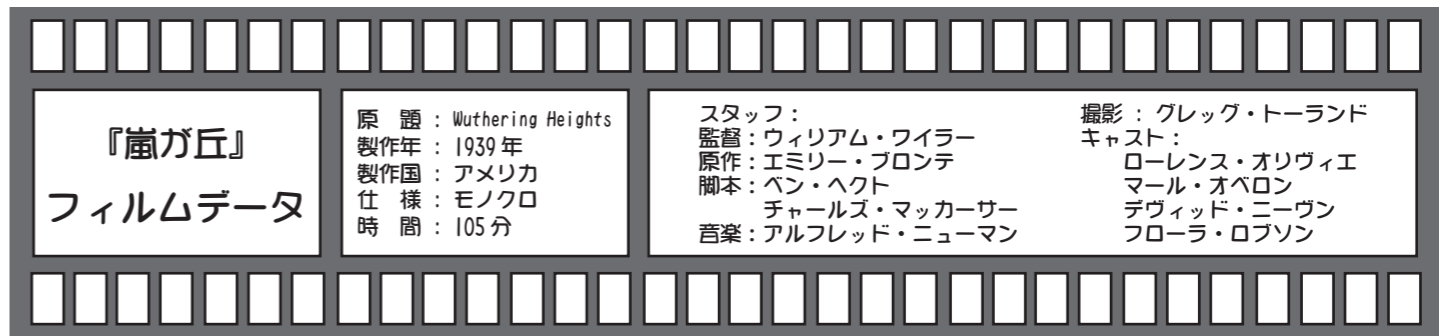
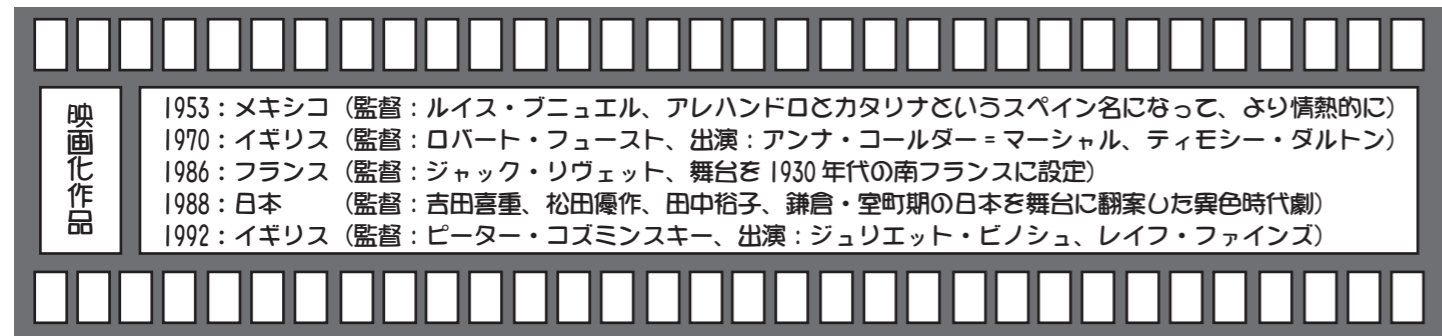
きみは言った。それなら亡霊になって、おれのところに出てくるがいい。殺された者は殺したやつに取りつくものだ。地上をさまよう亡霊がいるのは確かだよ。いつもそばにいてくれ。どんな姿形でいい。おれの気を狂わせてくれ。ただおれをこのどん底に一きみが見えないところに置きざりにだけはしないでほしい。ああ神よ! 言葉では言えない! おれの命なしで生きるなんてできない。おれの魂なしで生きるなんて無理だ」と、人間とは思えないような声でほえました。》

この凄まじい描写が心に残りました。監督:ウイリアム・ワイラー、主演:ローレンス・オリヴィエ、マール・オベロンの素晴らしいコンビで、どのような作品になったのか、期待が大きい。 S.N

## 「映画を読む、本を観る」

ブロンテ姉妹が活躍したのは、産業革命経て、文学が大衆へのアクセスをし始めた、ヴィクトリア女王統治のパクス・ブリタニカの時代。この時代に活躍したフランスのデュマやユゴー、帝政ロシアのドストエフスキーやトルストイなど、四半世紀前には、まだ『世界名作全集』などで気軽に読まれていたと思うが、その後、学校は教育に教養の涵養を求めず、社会の娯楽の多様化とともに全集そのものが消えてしまった。一方で、映画やTVドラマやマンガの世界で、物語の構造は繰り返りリスペクトされていようにも思えるのだから、これでいいのかもしれない。

そういう名作や、ミリオンセラーと言われるものの映画化も数多いが、配役から脚本・演出までピタリとはまる、というものは少ない。それでも、原作と映画は別という見方もできる。映画を観て、またあの長い物語を読み返してみようかという気にもなる。今、『象牙色の賢者』(佐藤賢一)という本を読んでいる。『椿姫』の著者であるデュマ・フェスの物語だ。ブロンテ姉妹と同時代に生きた人だった。ということ、これを書くために調べてはじめて認識したのだけれど、こうして世界が広がるのは楽しい。 e3



りぶらサポータープロジェクト  
『嵐が丘』

「シネマ・ド・りぶら」  
関連図書案内  
& DVD

監督：ウィリアム・ワイラー

評論



N778.2 共同通信社  
『20世紀の映画監督名鑑  
(Mook21)』



N 778.2 毎日新聞社  
『20世紀の大スター 100 撰  
(毎日ムック)』

ローレンス・オリヴィエ

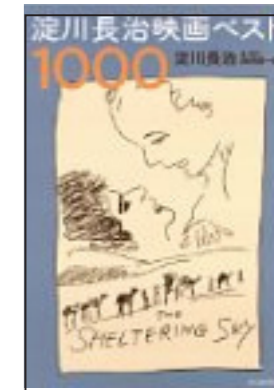


943.6 淀川 長治 / 著  
河出書房新社

『淀川長治映画ベスト 1000』

「嵐が丘」は当初その映画化権を持つ「駅馬車」のプロデューサーのウォルター・ウェンジャーが、シャルル・ポワイエの主演で取り始めたが難航していた。そこでゴールドウィンが映画化権を買い取り、主役をシャルル・ポワイエからローレンス・オリヴィエに変えるとともに俳優は端役まで全員英国出身者に切変えて取り組んだ。

N 778.0 『映画は語る』  
淀川 長治 / 著 中央公論新社



原作

933.6 大阪教育図書  
『絵と原文で楽しむ  
Wuthering He Emily Bront ë』



B 933.6 『嵐が丘』(岩波文庫)  
エミリー・ブロンテ / 著

933.6 『「嵐が丘」を読む』  
中岡 洋 / 著 開文社出版



933.6 『「嵐が丘」の謎を解く』  
広野 由美子 / 著 創元社



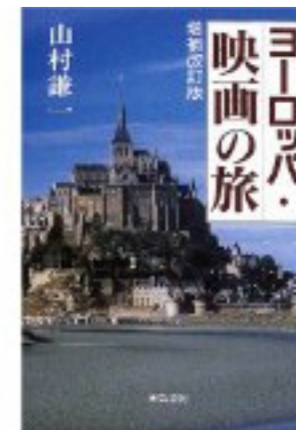
930.2 河野 多恵子 / 著 河出書房新社  
『図説「ジェイン・エア」と「嵐が丘」』  
ブロンテ姉妹の世界



930.2 彩流社  
『エミリー・ブロンテ神への叛逆』  
ジル・ディックス・グナツシア / 著

場所

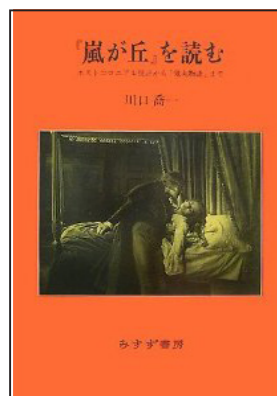
293.3 出口 保夫 / 著 世界文化社  
『美しき英国 旅と暮らしと紅茶と』



N 778.0  
『ヨーロッパ・映画の旅』  
山村 謙一 / 著 弦書房



G 293.3 山森 芳郎 / 著  
柘風舎  
『イギリスの田園風景  
キーワードで読む』



933.6 『「嵐が丘」を読む』  
ポストコロニアル批評か  
川口 喬一 / 著 みすず書房